

『みんなで考える杭瀬川』<sup>くいせがわ</sup> ～緩流河川の再生に向けて～

- 「<sup>すいと</sup>水都大垣」は、美味しく綺麗な水が自然に地下から湧き出し、水と共に発展してきた町です。しかし、その一方で地形的特徴から「洪水常襲地域」とも言われ、常に洪水に見舞われ、水に苦しめられてきた地域でもあります。大垣市の西側を流れる杭瀬川は、かつて曲がりくねった流れの中に緩やかな流れがあり、タナゴ類など生息していましたが、洪水の速やかな流下を目的とした治水対策としての河川の直線化等により、かつての緩流河川を特徴とした水辺環境が劣化しました。その環境を改善し再生しようと、国土交通省木曽川上流河川事務所が企画した呼び掛けに、地元自治会、NPO団体、大垣市など約30名が参加した現地見学会が22日（土）、大垣市野口地先の杭瀬川河川敷で行われました。

昭和20年代



平成24年度





- 小春日和となったこの日、一行は、河川環境の異なる杭瀬川6.4Kpと7.2Kp地点の2箇所を視察。参加者の一人は、水面を眺めながら、「杭瀬川本川はとても水が綺麗で感動的。子供たちが川遊びするのに最適な場所だ。」「本川に合流する旧河道（小河川）はゴミは少ないが、周辺の田畑からの土砂流出によりヘドロが堆積している。水が濁り、タナゴが生息できる環境ではない。」と感想を述べていただきました。



湿地の中に点在する複数の池（杭瀬川6.4Kp付近）

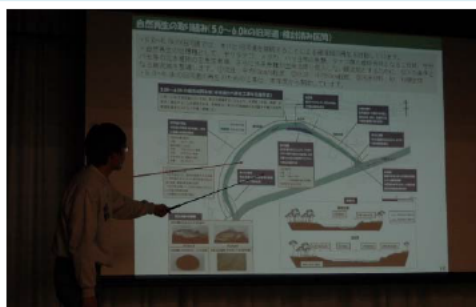


杭瀬川本川と接続する小河川（杭瀬川7.2Kp付近）

- 綾里地区センターで行われた意見交換会では、川の現況を踏まえた上で、これからの水辺再生に向けた熱い想いを参加者に語っていただきました。湧水群を活かしたタナゴやハリヨの復活、ゲンジボタルが飛び交う川づくり、子供たちが川遊び出来る水辺へのアクセス整備、間伐による明るい森づくりetc. 素晴らしい意見ばかりでした。今後は、これらの意見を具体化し、次回、構想図として提示し、改めて皆さんにご意見を伺うことになりました。今回、参加された有識者の一人、森誠一教授（岐阜経済大学・動物生態学）は、最後に「よい川づくりとは、行政のみに任せるのではなく、地域が主体的に関わり行動に移すことが大事。湧水による水の恵みと洪水による災い、上手く付き合い、「水都大垣」の名に恥じぬ水文化を築いて欲しい。是非、杭瀬川が「淡水生物の宝庫」と発信できるような川づくりを目指してほしい」と参加者にエールを送られました。



現存するヤリタナゴ（準絶滅危惧種）



杭瀬川の目指すべき姿（案）を説明する職員



意見交換会の様子



再生河道の目標種の例（ハリヨ）  
※大垣市環境基本計画より



森教授（岐阜経済大学）



川に対する想いを述べる参加者